



ユキオ・リピット氏インタビュー 屏風と金箔について

屏風にはふたつの役割がある。部屋のなかに置く間仕切りであると同時に、その空間を生き生きと彩り、新たな意味合いや雰囲気を出す絵画でもあるのだ。屏風を広げることで、格式ある空間になったり、彩り豊かになったり、遊び心ある雰囲気になったり、あるいは深遠な趣きになったりする。そのため、屏風を前に、歌会や宴、あるいは行事や宗教儀式など様々な営みがなされてきた。屏風は多様な役割を果たしてきたのである。

(中略)

忘れてはならないのは、日本は伝統的に、床に座る生活様式であったということだ。現代の私たちは、美術館で屏風の前に立ち、腕を組んでじっくりと眺めるが、江戸時代にはそのように鑑賞してはいなかった。たいていは畳に正座して眺めたのである。そのため、目線の高さはおのずと屏風の下方から中ほどにあり、鑑賞者は屏風絵に包み込まれるような感覚を味わった。絵を眺めるというよりも、絵の中に没入するような体験である。

ヨーロッパのルネサンス以来の古典的な絵画理論では、絵画は「世界を覗く窓」と考えられ、ひとつの視点から描くことが前提とされた。しかし、屏風をはじめとする日本の伝統絵画では、視点をひとつに定めて描くことはしなかった。そのため、絵を見る私たちも、さまざまな視点から鑑賞できる。左側あるいは右側から眺めてもいいし、画面から離れても、ぐっと近づいてもいい。屏風をはじめとする日本の絵画は、こうした多様な鑑賞の仕方を前提としているため、画面全体を見渡せる構図であることが求められ、変化に富む生き生きとした表現が育まれた。

絵を見るうえで定められた視点がなく、左右どちらから眺めても破綻することのない構図で描かれているのだ。観る人は、描かれた自然や街並み、人々の姿を、さまざまな角度から鑑賞する。それゆえ、屏風は自在に広げたり折り畳んだりできる構造になっている。様々な角度で広げ、異なる方向から眺めれば、そのたびに絵の中に新たな発見があり、どこに心惹かれるかも

変わる。同じ屏風を長く置いても見飽きないのは、鑑賞するたびに視点や状況がおのずと変化するからだ。

また、日本絵画は金箔との相性が非常に良い。特に余白を大きく取る構図では、貼り巡らされた金箔に光が当たって絶えず変化するきらめきを放ち、その質感や美しさが存分に発揮される。まだ電気がなかった時代には、そうした屏風を室内に置くことで、自然光や蠟燭の光を増幅させて、空間そのものを変容させることができた。屏風に貼られた金箔の表面は均質ではなく、わずかな凹凸が至るところに見られ、そのため、光が当たると重層的なきらめきを放つ。絵の中で金箔が貼り巡らされていれば、そこには何も無いということだが、それだけではない。きらめく金箔の装飾性が、その屏風が置かれた空間と響き合い、鑑賞者の想像力に働きかけるのだ。

"Interview with Yukio Lippit." Hoaglund, Linda, dir. Edo Avant Garde. 2019; United States; Japan.

<https://www.edoavantgarde.com/> (ユキオ・リピット氏インタビュー 出典:リンダ・ホーグランド監督『江戸アバンギャルド』2019年 アメリカ・日本)



円山応挙 《鶏図屏風》(部分) 松本松栄堂